

〔東西交流美術展によせて〕

南蛮屏風について

今回の「東西交流美術展」には、堺市博物館と大阪城天守閣のご好意により「南蛮屏風」(桃山時代)が特別陳列されますので、ここではこの興味深い一群の屏風絵についてご説明しましょう。

室町時代の終りごろから江戸時代初期にかけて、キリスト教の布教と貿易のためにポルトガル人が来朝し、日本がはじめて西洋文化に接したことはご承知の通りです。一方、当時の日本では民衆生活を描く風俗画がさかんでしたが、そのような近世初期風俗画の一環として作られたのが南蛮屏風で、今日でも国内国外に約60点の遺品があって、当時の人びとの間で異国趣味が強かったことを物語っています。

南蛮屏風は異国趣味の絵画ですが、元来日本人が鑑賞するために作られたので、わが国在来の画法により、普通六曲一双の屏風に描かれています。どの屏風にも必ず表わされているものは、ポルトガル船の日本入港、カピタン・モール(船団長)を先頭とするポルトガル人の上陸と行進、それを迎える南蛮寺(カトリック教会)の神父たちと南蛮寺内の光景、異国人を珍しそうに眺める日本人と日本の商店などです。南蛮屏風はほぼ3群に大別され、(1)向って左隻にポルトガル船の日本入港を描き、向って右隻にカピタン・モールを先頭とするポルトガル人の上陸以下の光景を配するもの。(2)第1群

で一双に表わされていた光景を向って右隻にまとめ、向って左隻にはポルトガル船が異国の港を出港する様子を描くもの。(3)向って右隻は第2群と同様で、向って左隻には異国における舞踊、競馬などの遊戯を描くもの、があります。これらについて、第1群が最も早く、ついで第2群、第3群が作られたという説がありますが、これには反論もあります。

南蛮屏風は何度も転写されて作られたので、後期のものほど図様の崩れがいちじるしいのですが、画面に表わされた港と南蛮寺は、長崎のそれであろうというのが、今日の定説です。しかし、現在のところ長崎で描かれたと推定される作品は1点もなく、遺品のすべては京都で作られたと思われる。南蛮屏風のような新しい主題の絵画が生まれるには、やはり中央の伝統画壇の力が必要だったわけです。南蛮屏風は狩野派の画家が肥前名護屋城の障壁画制作のために九州に下向して、長崎の異国風俗に接した文禄元年(1592)以後にはじまったようです。はじめは狩野派の画家によって描かれましたが、やがて他の画派や町絵師も手がけるようになり、異国趣味の続くかぎり、その制作は鎖国以後にも及んだようです。

近世における東西文化交流の姿を、南蛮屏風ほど具体的に、また華麗に示してくれる絵画はありません。(成瀬不二雄)



大阪城天守閣蔵
南蛮屏風(左隻)

季刊 美のたより No.60

昭和57年 8月12日

発行 大和文華館